

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370213

研究課題名(和文)幕末から明治初期の岐阜の芝居(劇場と役者)の実態

研究課題名(英文)Kabuki play in Gifu area at the end of Edo era and at the beginning of Meiji era - theaters and actors -

研究代表者

土谷 桃子(TSUCHIYA, MOMOKO)

岐阜大学・留学生センター・准教授

研究者番号：70331139

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：近世から明治時代前半にかけて、岐阜市の伊奈波神社周辺は芸能の盛んな地であった。明治初年に同地域に末広座・国豊座という二つの芝居小屋が開場したが、本研究では両座の詳細を調査した。両座では九代目市川團十郎などの有名俳優も興行していることや、火災や濃尾地震(明治24年)で焼失・倒壊した後どのように復興したかも明らかにした。

『岐阜日日新聞』記事調査から『岐阜地域芝居興行記録一覧稿(明治初年)』をまとめた。今後の岐阜地域の芝居研究の基礎資料となりうるものである。

研究成果の概要(英文)：Inaba shrine area in Gifu city, Gifu prefecture was a center of entertainment such as kabuki play at the end of Edo era and in the first half of Meiji era. Two kabuki theaters, Suehiro-za and Kunitoyo-za, were opened at that time there. This research aimed to clear details of those two theaters. The facts that famous kabuki actors such as 9th Ichikawa Danjuro came to the theaters and how the theaters were rebuilt after the Nobi earthquake in 1891 are shown in this research. "A list of Kabuki play records in Gifu area in Meiji" is one of the results of this research. It will be an essential material for this research field.

研究分野：日本近世文学

キーワード：明治初期の芝居 岐阜 伊奈波地域

1. 研究開始当初の背景

幕末から明治にかけての岐阜における演劇(主として歌舞伎)についてまとめて記載されている資料は、岐阜県・岐阜市の歴史全体を記した『岐阜市史 通史編 近代』(1981)、『岐阜市史 史料編 近代1』(1977)の関連項目にほぼ限られている。県史・市史という書物の性格上、詳細についての記載には限度があり、また両資料刊行後30年以上が経過するが、管見では研究の発展がほとんど見られない。

筆者は、明治15年(1882)に自由党総裁板垣退助が岐阜で遭難した事件が、高知、岐阜、名古屋で迅速に芝居化された事実を「板垣退助岐阜遭難の芝居～明治十五年の作品を中心に」(『岐阜大学国語国文学』38号、2012.3)で取り上げた。この論文では、事件が迅速に芝居化された事実や、板垣の出身地である高知及び事件現場であった岐阜で芝居になっていることを明らかにした。歌舞伎と壮士演劇の双方で芝居化されているため、両者の比較も試みた。

同芝居が上演されたのは伊奈波地域に存在した末広座という芝居小屋であったが、その小屋がどのような小屋で、どこに存在していたのか皆目見当がつかなかった。この点が気になり、本科学研究費を得て当時の岐阜の芝居小屋について調べることを試みた。先に述べたように、本件についての先行研究は非常に限られており、岐阜の地域史を語る上でも研究の価値はあると考えた。

岐阜地域全体の芝居の実態をいずれは解明したいという希望はあるが、まずその出発点として、幕末から明治前半(明治24年の濃尾地震以前)をターゲットとした。それは、筆者がもともと専門とする時代であり、また明治の新文化が入ってきた時期の旧芝居(歌舞伎)の動向に興味を引かれたからである。地域としては、前述の末広座を代表とする、「伊奈波三座」に焦点を当てた。江戸時代から伊奈波神社を中心とする伊奈波地域は岐阜における文化の中心地であり、芸能が盛んであったと記されている。「伊奈波三座」のうち、規模が大きかった末広座、国豊座を主たる研究対象とし、本研究を開始した。

2. 研究の目的

(1) 幕末から明治にかけての岐阜の芝居小屋の実態を明らかにする。先行研究(『岐阜県史』『岐阜市史』等)に名前が挙がっている芝居小屋は少なくないが、時系列に沿ってその発端から終局までが整理されているわけではない。まずは、考察・分析の基礎資料となる事実を収集し、蓄積することが最優先である。伊奈波三座のうち、末広座・国豊座について、開場期間、上演題目、役者を可能な範囲で明らかにする。

(2) 当時岐阜を訪れて興行を打った役者について調査する。具体的には、東京の歌舞伎の有力役者であった団菊左(9代目市川団十郎(1838～1903)、5代目尾上菊五郎(1844～1903)、初代尾上左団次(1842～1904))が岐阜でいつ・どのような興行を行ったか、興行が岐阜(および名古屋)地域に限られているらしい地方役者にどのような人物がいるか、の2点を明らかにする。

前者については、東京の歌舞伎がどのように地方に伝播しているのかの一例となる。可能であれば、上方の歌舞伎の岐阜(もしくは東海地域)への伝播の様子も明らかにしたいと考えた。

後者については、ほとんど研究が進んでおらず、初めてのまとまった研究になることが予想される。例を挙げれば、名前に「七賀(なか)」が付く役者名が名古屋および岐阜の興行記録では目立つ(『近代歌舞伎年表 名古屋篇』等による)。彼らはおそらく名古屋地域で活躍した「中村七賀助」に連なる者たちであると考えられるが、七賀助本人についてはいささか資料があるものの、その周辺人物については不明である。これらの人物について調査する。

(3) (1)、(2)を調査する過程で得た、末広座・国豊座以外の芝居小屋、伊奈波地域以外における芝居小屋の興行についても、情報を蓄積する。これは、今後の岐阜地域の芝居研究をより発展させるための基礎的な資料とするためである。より汎用性の高い資料とするため、歌舞伎をはじめとした芝居に限らず、見世物や相撲等の芸能も対象とする。

3. 研究の方法

(1) 幕末から明治初期の芝居についての原資料(新聞および雑誌記事)、先行研究から伊奈波地域を中心とした岐阜の芝居の情報を抽出し整理する。

具体的には明治の歌舞伎について知るための第一級資料である演劇雑誌『歌舞伎新報』1号(1879)～2巻6号(1897)(歌舞伎新報社のち玄鹿館)、岐阜地域についての情報は最も詳しい『岐阜日日新聞』が主たる資料となる。

その他に名古屋の当時の新聞類(『金城新報』『新愛知』『扶桑新聞』等)、『近代歌舞伎年表 名古屋篇』(岩波書店、刊行中)、『明治の演芸』(国立劇場演芸資料室)等も多く活用し、『岐阜県史』『岐阜市史』も当然参照する。

(2) 実地調査(末広座・国豊座跡地) 関係者へのインタビュー調査を行なう。インタビューは、長く伊奈波の地に在住の歴史研究の専門家(元豊田工業高等専門学校教授篠田壽夫

氏) 末広座所有者と目される安藤作次郎の子孫である国島幹名子氏に対して行なった。

篠田氏からは、この地域に特化した地域資料である『ふるさと岐阜・魅力発見大作戦 岐阜町金華の誇り』(特定非営利活動法人わいわいハウス金華・岐阜市歴史博物館編、岐阜新聞社、2009)をお教えいただき、その資料から国豊座の正確な場所を知ることができた(現在は賃貸アパートが建築されている)。

国島氏からは血縁者ならではの貴重な情報を得た。末広座跡地はまさに国島氏が現在住している地にあり、歯科医院となっている。氏からは、末広座の緞帳や明治・大正にかけての写真資料を見せていただいた。

また、岐阜県博物館所蔵の末広座の鬼瓦の現物を確認し、論文に写真を掲載した。

4. 研究成果

(1) 末広座・国豊座の開場時期をほぼ特定し、その後の興行状況を原資料に基づき明らかにした。論文「岐阜の伊奈波の芝居小屋 - 末広座と国豊座 - 」にまとめた。

両座は、明治初年に岐阜の伊奈波神社の近隣に開場した。同地域は明治以前から繁華な地であったが、明治期に入ると「座」を名乗る小屋が複数開場し、「伊奈波三座」という呼称も生まれた。その中で規模が大きく本格的な芝居を上演し得たのが、末広・国豊両座であった。

末広座は個人が開いたもので、焼失の憂き目に遭って再建されている。一方、国豊座は会社組織で運営されており、末広座焼失の間は唯一の本格的な芝居小屋であった。岐阜での興行には東西から役者が訪れていることや、岐阜ならではの役者が興行していることを示した。

末広座については、鬼瓦が岐阜博物館に所蔵されていたことや、所有者の子孫に直接話を聞いたことから、具体性に富んだ記載ができた。同座の姿は『農商工技芸 美濃乃魁名所国産の手引』(福井熊次郎編輯、1883)に挿絵として残っており、それも示した。

国豊座については、岐阜の土地・産業・教育・警察等全般を調査した『岐阜県治一斑』の第1回実施分(1895)に「国豊演劇合資会社」との記載があることを確認した。同座が会社経営であったことは、下記(3)の成果につながるものとなった。

(2) 両座の具体的な興行状況の例として、9代目市川團十郎(1838~1903)、5代目尾上菊五郎(1844~1903)、初代尾上左団次(1842~1904)の来岐興行について、前掲論文にて詳説した。彼らの岐阜での興行については、演劇雑誌『歌舞伎新報』や『岐阜日日新聞』の記事が比較的多く残っている。それらを元に、実態を洗い出した。

彼らの来岐は、明治15年(1882)2月・末広座(菊五郎、左団次)、16年(1883)2月・末広座(団十郎)、20年(1887)9月・国豊座(菊五郎)、29年(1899)6月・国豊座(左団次)の4回であった(このうち最後の29年の興行は、国豊座が再興された後の来岐であったことが、(3)の研究によって明らかになる)。雑誌・新聞記事から、彼らが名古屋の興行の間に岐阜を訪れていることや、末広・国豊両座で役者を取り合う事態もあったこと、役者たちが岐阜興行の際に鵜飼などの岐阜の風物を楽しんでいたことが浮かび上がった。名古屋地域の芝居との関連の深さや、岐阜ならではの文化を役者が堪能していたことを明らかにした。

(3) 末広座は明治19年に火事により焼失、国豊座は24年に濃尾地震により倒壊したことは先行研究で確認されていたが、その再築・再興について解明したのは本研究が初めてである。論文「岐阜の伊奈波の芝居小屋(2) - 末広座と国豊座 濃尾地震後の再築・再興 - 」にまとめた。

両座ともに再築はスムーズではなく、年単位での時間がかかった。末広座焼失後は国豊座が唯一の大規模芝居小屋として存在していたが、岐阜の文化の中心地が南下する一因となった濃尾地震により同座も倒壊し、伊奈波地域の芝居は一時絶えた。両座の再築・再興までの間、伊奈波の空地が相撲や芝居の仮小屋として使われることもあった。

両座は最終的には再築され、末広座は規模を縮小して26年4月に、国豊座は会社組織による運営で28年12月に復活し、伊奈波の芝居小屋が再度並び立つこととなった。

(4) 末広・国豊両座の動向を時系列で整理するにあたり、現存の『岐阜日日新聞』(岐阜県図書館所蔵マイクロフィルム資料)の、明治30年までの芝居・見世物関連記事を抽出した。抽出の際、現岐阜市に限らず、岐阜県地域全体についての記事を拾うことを心がけた。

岐阜市内では、末広・国豊両座が姿を消していた期間、台頭してきた関本座(今小町)、美殿座(柳ヶ瀬)、蛭子座(笹土居町)、泡雪座(金津廓)、寿座(同)が目立ち、市内を離れると高砂座(大垣)、宝福座(同)、榎元(榎本)座(多治見)の記事も目立つ。

その調査結果を冊子『岐阜地域芝居興行記録一覧稿(明治初年)』にまとめた。明治初期の岐阜県地域全体の芝居の興行状況を俯瞰することができる基礎資料であると自負している。岐阜県図書館、岐阜市立図書館等への寄贈をし、今後岐阜の芝居を研究する後進の足がかりになる資料である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

土谷桃子、岐阜の伊奈波の芝居小屋(2) - 末広座と国豊座 濃尾地震後の再築・再興 -、岐阜大学留学生センター紀要 2015、査読有、2016、掲載予定

土谷桃子、岐阜の伊奈波の芝居小屋 - 末広座と国豊座 -、岐阜大学留学生センター紀要 2014、査読有、2015、21-35

〔その他〕(計2件)

土谷桃子、岐阜地域芝居興行記録一覧稿 (明治初年～、調査成果冊子)

土谷桃子、公開講演「岐阜の伊奈波に芝居あり」(岐阜市立図書館第32回文学ライブ)、岐阜市立図書館、2014

6. 研究組織

(1) 研究代表者

土谷 桃子 (TSUCHIYA, Momoko)
岐阜大学・留学生センター・准教授
研究者番号：70331139